資料４

学校関係者の質問紙調査による結果概要（速報）

※現段階では暫定的であり、今後一部結果等がかわることがあります。

・質問紙調査は、令和３年度に２５人学級を導入した学校の学級担任、校長を対象として令和４年３月に実施。２５人学級の対象校において、３０人学級と比較してどのような指導が可能になったか、どのような効果が得られたかについて調査。
・４段階の回答･･･４点（そう思う）～１点（そう思わない）

【学習環境の視点】（学級担任）

〇一人一人の学習状況を把握し、きめ細かな指導の充実を図ることができた。(3.9/４点)
〇学習の遅れが見られる児童に、補充的な学習を行うことができた。(3.8/４点)
〇発言の機会を増やしたり、話合いの時間を充実させたりすることができた。(3.4/４点)
〇実験や実習等の体験的な学習を行うことができた。(3.0/４点)
〇教材、教具や学習シートなどを個別に準備することができた。(3.4/４点)

（具体的な記述の一部）

・個々に目が行き届くため、個に合ったきめ細かな支援ができた。そのことにより、たし算やひき算の計算カードの取組も全員が短期間に習得できた。
・机間指導をする中で、つまずきのある児童を把握し、その児童に必要な声かけをすることができた。それにより、子どもの理解が深められた。
・授業の中で全員発言する機会をとることができ、児童一人ひとりが発言する経験を蓄積することができた。経験を重ねてきたことで、クラス全体で積極的に発言する雰囲気ができ、児童の発言することへの恥ずかしさや抵抗感が薄まってきたと感じる。

【児童の人間関係・生活環境の視点】（学級担任）

〇日常の観察や生活の記録から児童理解を十分行うことができた。(3.8/４点)
〇話を聞いたり、声かけを多くしたりするなどのコミュニケーションの充実を図ることができた。(3.8/４点)

（具体的な記述の一部）

・いじめ、不登校、問題行動など、児童が抱える問題へのきめ細かな早期の対応ができる。
・多人数に比べ、児童同士がお互いの頑張りや活躍に目を向けやすくなり、励まし合ったり賞賛し合ったりする中で自分や友達の「良さ」として自覚するようになってきた。
・一人一人に声をかけることが増えた。また、採点などの作業が軽減され、休み時間に子どもたちと遊ぶ機会が増えた。そのことにより、児童同士がお互いの良さを認め合え、学級に落ち着きが生まれ、まとまりが向上した。

・日直、当番等、一人の児童に対しての回数が多くなり、やる仕事が覚えられた。そのため、積極的に取り組めた。

【学校経営・運営の視点】（学校長）

〇学級担任が児童の実態を詳細に把握することができるようになった。（4/４点）

〇個々の課題に対して共通理解を図りやすくなった。（4/４点）

（具体的な記述の一部）

・少人数学級になり、担任と接する機会が増えたことによって、学習面・生活面の両面にわたり、質問や相談事をしやすくなった。

・1 日の中で、担任と会話をする時間が増したことにより、担任も児童理解が深まり、トラブルなどもその影響が大きくなる前に対処でき解決を図ることができる。よって、少人数学級の実施は、個別最適化の学びにつながる点で、高い効果を期待できるものと思われる。

・今後、ハード面で環境が整えられ全県において実施できる日がくることを願っている。